シンポジウム

オープニング　16
古都祝奈良 開幕　22
なら国際映画祭2016　24
東大寺にみる東アジアの技術と文化　26
クロージング　28

シンポジウム

「東アジア文化都市2016奈良市」における文化交流事業の一つとして、シンポジウムを実施しました。各事業に関連したメンバーによる特別講演やパネルディスカッションなどで、それぞれの事業の内容やコンセプトをより分かりやすく深く伝えることで、関心を高めるとともに理解を深めました。

「東アジア文化都市2016奈良市」オープニング記念シンポジウム「移動と文化 – 黒潮文化圏としての東アジアから未来を展望する」

2016年3月26日(土)　東大寺総合文化センター 金鐘ホール

「東アジア文化都市2016奈良市」オープニングの第一部として、記念シンポジウム「移動と文化」を開催しました。日中韓から歴史学、文化人類学などの各分野を代表する5人の専門家が集い、古代から連綿と続く東アジアの交流についての最新の知見をそれぞれが発表し、そこから導かれる今後の展望、「東アジア文化都市」プロジェクトがこれからの東アジアに対して拓いてゆく可能性について話し合いました。

〈登壇者〉

パネリスト　王 勇／中国(浙江大学日本文化研究所所長／日中交流史)
全 京 秀／韓国(ソウル大学名誉教授／文化人類学)
小島 毅／日本(東京大学大学院教授／中国思想史)
伊藤 亜人／日本(東京大学名誉教授／文化人類学)
青柳 正規／日本(文化庁長官[当時]・東京大学名誉教授／古代ギリシャ・ローマ美術史)
コーディネーター　北川 フラム／日本
(「東アジア文化都市2016奈良市」アドバイザー／アートディレクター)
プレゼンテーター　蔡國強／中国(アーティスト)

■シンポジウム開催にあたって　北川フラム

この度のシンポジウムは、「黒潮文化圏」というテーマのもと、日本および中国、韓国の研究者の中で私が知る最もすばらしい人たちに参画いただいています。青柳正規先生は、ギリシャおよびイタリアの海の歴史に関して極めて深い造詣を持っておられ、しかも、文化庁長官として日本の文化行政を開いてこられた方で、今日のテーマにはぜひ入っていただきたいと思い、特別にご出演いただくことになりました。

日本、中国、韓国の間にはいろいろな政治経済のかかわりがあり、時に厳しいものがあり、それぞれに認識の違いはありますが、厳しい時代であっても個々の極めて優秀な人たちが国と国、人をつないできたし、いろいろな意味で文化的蓄積をしてきました。

歴史を学ぶことは自分を省みることであり、歴史を鏡として未来を切り開いていくことをバックボーンにしていきたい。これがシンポジウムにおける私の出発点です。このシンポジウムを東大寺という、まさに奈良あるいは日本の仏教を代表する場所で開催することは非常に意味があると思います。海を介して移動していく文化について考えていきたいと思います。

ゲストプレゼンテーション　蔡國強 “船をつくる” プロジェクト

「東アジア文化都市2016奈良市」の開幕に合わせてスタートした蔡國強氏の「“船をつくる” プロジェクト」。中国の伝統的な木造帆船を東大寺の大仏殿に向かう参道脇で約1か月間、中国からやってきた10人の船大工たちが公開制作し、完成した船を閉幕まで鏡池に浮かばせる作品のコンセプトを語っていただきました。このプロジェクトは、海を介して互いの文化が影響し続けた文化交流の象徴である“船”に込められたメッセージ「我々は再び同じ船に乗って未来へ向かって航海することができるだろうか」という問いを提起しています。

ブックロード — 移動する書物・布帛・黄金

王 勇(オウ ユウ)
(浙江大学日本文化研究所所長／日中交流史)

「移動と文化」というテーマを受けて、「ブックロード」について語りたいと思います。ブックロードとは「書物の道」、ネーミングしたのは私です。中国と日本との交流は聖徳太子の時代に本格的に始まったわけですが、飛鳥時代に派遣された遣隋使たちは何を目指したのでしょうか。

平安時代に書かれた『経籍後伝記』には、「小治田朝(今案ずるに推古天皇)十二年(604年)歳次甲子正月朔をもって、始めて暦日を用う。この時、国家に書籍未だに多からず、ここに小野臣因高を隋国に遣わして、書籍を買い求めしめ、兼ねて隋天子を聘う」とあります。「日本に書物が少ないから、中国に行って買い求めさせる」というのです。注目すべきは、書物を求めることが先、政治的な用務がその次という順序です。その後、遣唐使はその伝統を受け継ぎ、それをさらに発展させた形で本格的に中国に書物を求めつづけました。

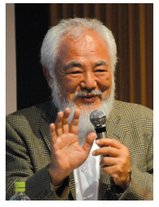
唐代の歴史書である『旧唐書・日本伝』は、「開元の初めに、また使を遣わして来朝す(中略)得る所の錫賚をもって、ことごとく文籍を市い、海に泛んで還る」と記しています。開元五年(717年)、阿倍仲麻呂や吉備真備が遣唐使として中国に渡ったわけですが、彼らは、唐政府から与えられた布帛と推定される「錫賚」をなげうって書籍を購入したという意味です。一方、西からやってくる西域の遣唐使たちがシルクを求め、シルクを満載して帰ったことから、東西間の交易路は「シルクロード」と呼ばれています。ところが、日本の遣唐使たちはシルクではなく、書籍を求め書籍を持ち帰るから、それはシルクロードというよりも「ブックロード」と言う方がふさわしいと思われます。それが私のネーミングのきっかけです。このように中国と日本の間を行き交う船はまず書物を大量に運んだわけです。

では、なぜ、日本人はシルクを要らなかったのでしょうか。日本は西洋諸国のようにシルクの製品を受け取るばかりではなく、大和時代にはすでに蚕、桑、養蚕の技術を習得し自分で生産していたのです。奈良時代にはシルクの大量生産を実現し、また大量生産したシルクを貨幣として使っていました。とくに国際交流や海外貿易には専らシルク類を貨幣として使っていました。中国や新羅との交流で国費として支払っているのはほとんど布帛でした。遣唐使たちが中国へ行くための旅費も、大使から水手までの全員に、布、綿、絹といった税収の布帛で支払われていました。要するに日本のシルクを中国で貨幣として使っていたのです。開元のはじめ、海を渡った遣唐使は儒教を習うときに学費を「白亀元年」の調布で支給したと伝えられています。遣唐使の船は、布帛を満載して中国へ向かったということになります。

マルコ・ポーロは『東方見聞録』で「この国(ジパング)ではいたる所に黄金が見つかるものだから、国人は誰でも莫大な黄金を所有している」と書いています。また宮崎正勝氏は『黄金の島ジパング伝説』で「唐代に遣唐使の一行が生活費などに充てるために持参した膨大な量の砂金が『黄金に満ちた島』の噂話を生み出し、その噂がイスラーム商人の間で膨らまされることで誕生したのが、『ジパング』伝説のルーツとなるワクワク(倭国)伝説である」と述べています。前述のように、7～8世紀の遣隋唐使は布帛を国際旅費として持参していましたが、9世紀のはじめに黄金を国際貨幣として書籍を買った事例が現われました。『日本紀略』に804年の遣唐使に対して、朝廷より大使に金二百両、副使に金百五十両を賜わったとみえるのは、遣唐使に黄金が旅費として支払われた最初の記録です。また『送最澄上人還日本国序』によると、この遣唐使にしたがった最澄は持参の黄金を唐の役人に献金したが拒否され、それでこれらの金で紙を買って、天台の書物を書写したという美談佳話が伝えられています。8世紀を通じて、シルクは国際貨幣でした。9世紀となると、日本は陸奥産の砂金をもって新たな道を切り開き、黄金でブックロードを支えたのです。

文化は「交流」といわれますが、実は東アジアを還流しながら独自の文明景観を作り上げているのです。シルク製品のみ輸入する西洋とは違い、日本は早くから養蚕や桑栽培の技術を習得し、シルクロードならぬ「蚕桑の道」を形成し、8世紀ごろ国際貨幣としてシルク輸出国となりました。布帛を売って書物を購入して持ち帰る遣唐使らは、物質文明より精神文明を求めることから、中国の書物『籌海図編』では「文明使」と呼ばれています。

9世紀から、遣唐使らは布帛より便利な砂金を携帯して海を往来し、ブックロードを支えました。船は、書物、シルク、黄金を載せて東アジア世界を動き回りました。日本のいろいろなものが東アジアに運ばれると同時に、海外の文物を大量に持ち帰る、それが奈良の文化の繁栄につながったと考えられます。



共進化と共生

全京秀（チョンギョンス）
（ソウル大学名誉教授／文化人類学）

歴史ある奈良の東大寺で東アジアのことを語る――それは、本当に意味があることだと思います。ここでは生物学の用語を借り、「共進化と共生」と題して、私は古代から日本への文化の流入の重要な窓口のひとつであり続けた黒潮文化圏の枠組みの話をしてみたいと思います。一緒に進化しながらともに生きていく東アジアの「人間」たちをとりあげてみたいのです。

黒潮はフィリピン諸島の東を通って台湾を抜け、九州の南西で日本列島の南岸を通って東に流れます。また一部は、北に分岐して韓国へ向かいます。フィールドワークに際して、私は黒潮文化圏の食生活に共通する重要な魚であるトビウオをパプア・ニューギニアでも食べましたし、屋久島でも、台湾でも食べる機会がありました。台湾の南のほうのヤミ（タオ）族はトビウオを「アリバンバン」と呼んで大切にしています。韓国でもトビウオは結構食べますし、その卵もたくさん食べます。

人間が生きていくためには、食べ物を食べなければなりません。黒潮文化圏には共通する食材があるという例としてトビウオを取り上げましたが、食べ物は人間の体を作り、とくにその骨格を形作ります。それでは、黒潮文化圏の人たちが、死後の人間の骨といかに付き合ってきたか、その共通する要素を見てみましょう。黒潮文化圏には、「洗骨」という風習があります。これは、葬送の方法のひとつとして、人の死後の骨を洗い清めて大切に祀るという習慣です。左の写真は1915年、マリノブスキという人類学者が、黒潮文化圏の南側のパプア・ニューギニア東端に位置するトロブリアンドという小さな島で撮った写真です。右の写真は、私がニューギニアを調査したときの写真です。

フィリピンにも洗骨の習慣がありました。フィリピン大学に人類学科を創設したオトリー・ベイヤー先生という人類学者がいました。彼はアメリカ人で、1914年からフィリピン大学で教鞭をとりました。彼の妻はイフガオ族でした。イフガオ族というのはフィリピンのルソン島の北部の山の方に住む先住民族で、彼もフィリピンの葬儀について研究していました。イフガオ族の世界遺産「コルディエラの棚田」で有名なバナウェという町にベイヤー先生のお墓がありまして、今まで彼の骨は3回洗われたのだそうです。お孫さんに聞いたら次の時も洗うと言っていました。祖先への敬意をこめて何度も骨を洗い続けるという同じ習慣はマレーシアにもあります。

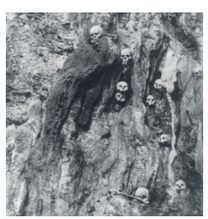
台湾についてはどうでしょうか。台北帝国大学の教授であった金関丈夫先生という人類学者がいました。金関先生は、1937年に「台湾本島人洗骨の風俗」を発表し、1941年には、通常、拾骨（洗骨）は死後三年以上たってから行い、「甕棺を『載骨盆』と云ふ」と記しています。

そして沖縄・奄美の島々です。西表島や与那国島、沖永良部島、与論島などにも同じように洗骨の風習があり、一部の島々では現在も行われています。1800年頃中国で出版された『百苗図』という絵入りの本があるのですが、そこに描かれている洗骨の絵と、私の先輩が与論島で撮った写真は、まったく同じことをやっています。

先の金関先生は、山口県の土井ヶ浜を調査し――そこは、今は「土井ケ浜遺跡・人類学ミュージアム」になっていますが――人が死んだ後、きちんと骨を洗って、全部同じ方向を見るように海岸部にならんで埋葬された人骨を発掘しました。それは、渡来人たちの集団が、死後も自分の故郷を眺めていたいと考えた証拠とされています。

そして韓国西南部の珍島（チンド）の例を挙げましょう。そこでは、死体を草で覆った仮墓の中に入れて、6年か7年後に骨を洗って綺麗にするのです。

このように、共通する食生活と共通する死後の世界をもった人々が、黒潮の流れに乗って南から北へ移動した結果、ひとつの黒潮文化圏を形作ってきたのではないかという考え方をお話してみました。



トロブリアンド島
（マリノブスキ撮影, 1915）

パプア・ニューギニアのビアク島
（全京秀撮影, 2009）

東アジア海域文化交流　寧波・済州・奈良

小島 毅
（東京大学大学院教授／中国思想史）

私は中国を研究対象にしていますが、寧波という都市は日本の歴史にとって重要です。極論すれば長安以上に重要かもしれません。ここ東大寺の南大門というと、皆さんは金剛力士像の方ばかりご覧になるかもしれませんが、大仏殿側に雌雄一対の獅子の石像があります。南大門は1180年の平氏による焼き討ち後の再建で、16世紀の戦火は逃れています。この獅子も鎌倉時代初頭のものなのですが、なんと寧波郊外の石を使って伊行末率いる石工集団が造ったものです（山川均編『寧波と宋風石造文化』汲古書院）。これは、平安時代後半以降、中国における対日交易港として寧波（当時の名称は明州）が指定されていたことに由来します。

14世紀ともなりますと、寧波と日本の間に多くの船が行き来してきました。そのなかで、1323年に寧波を出航して日本に向かう途中、済州島付近で沈没してしまった船がありました。本来の航路からは大きく外れていますので、暴風か海流で流されたのでしょう。実際、その事例が他にも知られており、済州も海域交流のうえで重要な役割を果たしていました。その船は1976年に発見されて引き揚げられ、今は「新安沈船」と呼ばれて韓国木浦の国立海洋遺物展示館に陳列されています。この船は京都東福寺ゆかりの船で、多くの唐物を載せていました。海底からは陶磁・銅銭・香木などが見つかり、船体とともに展示されています。書物や絵画も運んでいたはずですが、紙製なために残念ながら海水に溶けてしまったと思われます。

私どもは2005年から5年間、東アジア海域交流についての共同研究を行いました。研究期間中の2009年夏には、奈良国立博物館で「聖地　寧波――日本仏教1300年の源流　すべてはここからやってきた」という特別展が開催されました。南大門の獅子が寧波からやってきたこともこの研究で実証された成果です。

もう一つこの研究に関してご紹介したいのは、奥州平泉のことです。通常シルクロードの東の終点は奈良であると言われていますが、実は奈良・京都より先、日本列島の東北方面にまでその道は伸びていました。それが2011年に世界文化遺産登録された平泉です。平泉は奥州藤原氏の政治拠点として12世紀の約百年間栄え、陶磁器や書物など、まさにブックロードを通って日本に伝わってきたものが今も残っています（薮敏裕編『平泉文化の国際性と地域性』汲古書院）。平泉の寺院にある浄土庭園はご当地奈良の影響を受けていまして、私も5年前に実地調査に参りました。源流はおそらく中国でしょう。共同研究のこれらの成果は、一般読者向けに『東アジア海域に漕ぎだす』という6巻のシリーズで東京大学出版会から刊行されています。

12世紀以降、興福寺を中心に仏典の木版印刷が行われていました。「春日版」と呼ばれるもので、この印刷技術も中国伝来でした。「唐物（からもの）」という言葉がありますが、この「唐」はもちろん主として中国ですけれど、韓国（＝韓（から））の意味も含まれています。日本の伝統文化はこれら舶来の唐物に刺激されて発展してきました。今年、寧波・済州・奈良という、海域交流ゆかりの3つの都市が同時に東アジア文化都市になったのを機に、この問題への社会的関心が高まることを期待しています。

さて、私は儒教を研究対象にしています。儒教の中の一流派に宋学があります。日本では朱子学と言ったほうが通りがよいと思います。朱子学の開祖は朱熹（しゅき）という人で、12世紀後半に活躍しました。南大門の獅子が日本にやってきたのは、まさにその頃です。この時代に中国で経書、いわゆる四書五経を新しく読み直す学問がおこります。「理」とか「気」とかいう概念を使うことによって、宇宙のすべての出来事、我々人間社会で起こっているあらゆる事象を合理的に説明しつくそうとします。また、人間社会の歴史を、かくあらねばならない、こうあるべきだという価値判断で語ります。つまり歴史認識ですが、ある事件が実際にどうであったかというよりも、それをどう評価すべきかという視点から見る作業こそが歴史であるという主張をします。教科書でも「朱子学は大義名分論を説いた」と書かれているとおりです。朱子学は、日本には鎌倉時代に伝わり、江戸時代後半には藩校などで学ばれるようになりました。こうして中国の朱子学が提唱していた政治路線、「尊王攘夷」が、19世紀の半ばに日本で大流行します。中国で生まれた朱子学がどのように韓国や日本に伝わり、そしてこれらの国々に今もどのような影響を与えつづけているかというのが、私の問題関心です。朱子学は獅子石像のように目にはっきりと見ることはできませんが、精神文化の面でも東アジアの3つの国は古くからつながっていました。

「歴史を鑑（かがみ）とする」ということばがあります。昔の出来事を調べることで、今の状況に対処する智恵を汲みだすことができます。東アジア3か国が昔から密接な交流の歴史を持っていたことをあらためて認識することが、互いに良好な関係を築く礎になると私は信じています。

東アジアの海洋交流における漁民

伊藤 亜人
（東京大学名誉教授／文化人類学）

私は、東アジアの海洋交流において、海に生きていた漁民がどういう役割を果たしたかをテーマとします。陸上からではなく、沿海の生活者の側から考えたいと思うのです。その中でも、最も海に即して生活してきた船上生活漁民を取り上げます。彼らは日本では瀬戸内海、九州におり、東南アジアにもずっと広がって、海を行き来してきました。周縁的・流動的な海民に注目した宮本常一・網野善彦の視点を東アジア全域に活かして考えてみたいと思います。

日本社会における海洋性とは何か。日本や日本人が海洋国家とか海洋民族と言われ出したのは、明治以後のことであり、海岸に住んでいても、海に背を向けて生活してきた人が大部分だったと宮本さんは繰り返し強調して言います。その一方で、陸に土地も農地も持たず、漁業だけをやっていた人たちがいた。この人たちは、かつて封建体制のもとでも特殊な位置付けにより特権を与えられ、あるいは陸上の藩や荘園主にとって特殊な業務を担い、その見返りに特権的な漁業権を安堵されていました。彼らは、島から島、あるいは海から海へと広がっていく中で、まさに交流が彼らの生活そのものでした。

日本にはこうした優れた漁民の伝統があります。それは、古代の海女からはじまって、荘園の御厨や御菜浦、江戸時代には藩の水主浦として船運などの御役に従事し、そして明治以後から今日に至るまでは専業漁民という漁業専門のエキスパートとなってきました。今も各地の漁業者の中でこうした漁師浦が主役を担っている場合が多いのです。海を生活の場とし、陸上農民との分業体制により交易を直接行ないながら漁業をエキスパートとしてきた人たちの系譜というのは、文献上でたどることは難しいのですが、ずっと続いてきました。それは日本だけでなく中国の沿海、東南アジアにおいても同じです。日本では近代以後つまり明治以後、四民平等の理念のもと、彼らも国民としての権利や生活を保障される一方で、漁業についても独占的な漁業慣行に代わって新たな規制を受けるようになり、新しい体制の中で生活伝統の特色がしだいに失われてきました。しかし、失われながらも、彼らは地元の漁業ばかりでなく、水運関係、船のパイロットや水先案内人、船員、あるいは潜水夫といった特殊な役割も担ってきました。その意味では、彼らの海に生きる姿勢は今日に至るまで基本的に受け継がれています。こうした伝統漁民の中でも船上生活漁民はさらに特殊なエキスパートです。現在もなお、広島県豊島、あるいは天草の宮田船と呼ばれる人たちが現代の機械化された船で情報機器を活用しGPSを利用し、暗号で連絡を取り合いながら機動力を発揮した集約的な漁業をやっています。

時代を遡れば彼らは、かつては陸に土地をもたず、船溜りだけを持って船の上で一生涯暮らす〝漂泊漁民〟に連なる生活伝統の担い手でした。こうした漂泊的漁民は、日本ばかりでなく東南アジアや中国の浙江省から海南島にかけて、沿海・島嶼部や大河川にも広く見られました。例えばビルマのモーケン族はビルマの南、メルグィ諸島からプーケットやタイの南部の海域を小集団で移動し、連携しながら一つの海域社会をつくっていました。中国沿海では「蛋家」とか「九姓漁家」といわれる船上生活漁民が知られています。日本における独特の船上生活の漁民については、私は学生時代の1968～69年に彼らのグループに長崎県平戸近くの生月（いきつき）島で出会っています。写真はその時に撮ったものです。

こうした船上生活漁民に共通するのは、機動性に溢れ、領海を持ちながら、時には他のグループと連携して遠征したりもしますが、平時には陸との間に分業が保たれ、住み分けをして交易するという点です。中国の蛋民は戦乱時には海賊・海寇と化し、明代には蘇観陞や周才雄の外、蛋酋梁本豪は倭寇とも連携していました。中国歴代の王朝は、彼らを定着化させるために蛋兵として兵役に編入したり、採珠（真珠採り）や製塩や網漁に従事させて税金を徴収したりするのですが、いざとなると彼らは船で逃げて反抗するという切り札をもっていました。彼らは、固定的な権力や上下の位階的な支配には属さずに、小さなグループで交流し離合集散しながら一枚岩の大きな組織にはなじまず、それでいて独特の横の交流と連帯による秩序を担って、広い沿海社会を作ってきたのでした。彼らは紛れもなく地域を超えた交流の主役であったのです。

長崎県生月島舘浦に停泊する広島県豊島の船上生活漁民（1968年）。当時この海域ではこうした家族乗り組みの小船が56艘で船団を組んで、仲間同士が無線で情報交換し、出漁先の漁協とも連携しながら漁を行なっていました。

地中海と日本海

青柳 正規
（文化庁長官［当時］・東京大学名誉教授／古代ギリシャ・ローマ美術史）

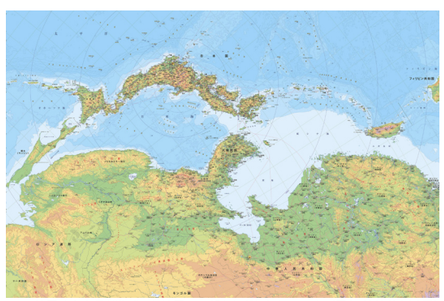
王勇先生は「ブックロード」のお話をされましたが、世界を見るとさまざまな道があります。シルクロード、それから海のシルクロード、ヨーロッパにはバルト海から地中海への琥珀の道があります。また、アレキサンドロス大王はギリシャからアフガニスタンまで東征をしますが、これは貧乏だった大王が銀を求めての旅だったという説もあります。最近よく言われるのは、「シュガーロード」。江戸時代、長崎に砂糖が着くとそれがずっと大阪や江戸まで運ばれる、その途中で小城羊羹がつくられたと言われています。一方アジアでは仏典を求めて中国からインドにまで行く違うブックロードもありました。人類は常に新しい知識、知恵、輝きある文化を求めて彷徨い、それが人類の文化文明を発達させてきたという気がします。

私はパネリストの中では唯一専門外の人間ですので、専門である地中海との比較を通して本日のテーマについて語ってみたいと思います。海というのは陸地で言えば砂漠のようなものです。砂漠というのは普通の人間にとっては大変な障害ですが、そこに砂漠の船であるラクダがあれば、あらゆる方向へ行くことができます。陸地、大陸からみると水平線上には何も見えませんが、例えば地中海では島が多いので、島と島の中間まで行けば、向こうに島が見えるようになり、陸よりもはるかに広い世界を掌握することができるのです。

世界の海は、オーシャン（大洋）と、沿海、それから陸地に囲まれた地中海の3つの海に分類することができます。太平洋は海流が流れるオーシャンです。日本海は地形的に見ると地中海に近いのですが、下から黒潮がダーっときて、上から対馬海流がダーっと入ってくるので「沿海」と定義します。地中海は、日本海の約4倍の広さがありますが、流れ込んでくる川はナイル川とロワール川、それから黒海の方から水が流れ込んでいる、それだけです。地中海というのは非常に不健康な海なのです。私は日本海でも地中海でも海洋調査をやりましたが、日本海で海底の地質を調査するとサーチライトを当てるだけで魚がぐわーっと集まってきて撮影できません。ところが地中海ではサーチライトを当てても、小魚がちょこちょこっと来るぐらいです。それほどに違います。その不健康さが「美しい地中海」をつくり、プランクトンがたくさんいて海流が速いという健康さが、東シナ海あるいは日本海を、地中海のような澄んだ淡青色ではない、濃い色にしているのです。しかしその海流のおかげで、全先生がおっしゃったように東南アジアの習慣が日本海にまでつながっている。世界的に見て、黒潮ほど生き生きとして、漁獲量が多く、人間の依存度が大きい海流はありません。明治以降、日本はさまざまなものを文明開化のために輸出していきますが、シルクと同じように海産物の干物が明治時代には日本の大変重要な外貨獲得のための輸出品でした。そういうことを考えると、我々はこの海を大切にしながら生きていく、大事にしていく知恵をだしていかねばならないと思います。

大陸で稲作が興り、稲作が農業の中心となっていった頃、日本はまだ狩猟採集の文化でした。しかしある時、中国大陸あるいはもっと南から稲作が伝わってくると、それによって日本列島の文化レベルはぐーんと上がります。稲作の可能なところではほぼ本州のすべてで稲作がおこなわれ、人口一人あたりの収穫量が大陸の収穫量を越えていくのです。そして、またあるところまでいくと平衡状態となり、そこにまた違う文化が飛びこんできて、次にまたストーンと発達していく。文化や文明、あるいは社会の経済状態というものは、じわじわと曲線的に上がっていくのではなく、ある意味では階段状に上がっていくのです。その発達度の違いが地域での多様性を生み、多様性があるからこそ、互いを真似てもう一段上がっていく。ですから、海を囲んだ周辺地域がこのような多様性を持つことが、非常に重要ではないかと思うのです。

富山県では日本海学というのがありますが、このように地図を反対にしてみると、世界が全く違って見えてきます。そうすると、このあたりはもっと活発な交流があっていいのではないかと思います。この東アジアにおいて、どのような経済状態、政治状況になろうとも、お互いの文化を知り、刺激し合い、自分自身の文化を相対して、相手の文化を尊重していけば、この地域での平和を維持しながら発展していくことができる。そのためには、寛容と信頼と自制を頭に描きながら交流を図ることが重要ではないかと思います。



この地図は富山県が作成した地図の一部を転載したものです。〈平24情使著238号〉

「古都祝奈良 － 時空を超えたアートの祭典」開幕記念アーティストトーク

2016年9月2日(金)　ならまちセンター 市民ホール

Program

主催者あいさつ　文化庁長官官房国際課長　北山 浩士
来賓あいさつ　慶州市長　崔良植
慶州市　伝統芸能披露　サムルノリ
記念対談「場の力とアート」
　川俣　正
　北川 フラム
作品紹介
　アイシャ・エルクメン(トルコ)
　ダイアナ・アルハディド(シリア)
　サハンド・ヘサミヤン(イラン)
　シルパ・グプタ(インド)
　紫舟
　宮永 愛子
　西尾 美也
　黒田 大祐
　林　和音
　岡田 一郎

文化庁国際課長・北山浩士氏による主催者あいさつ、韓国慶州市長・崔良植氏による来賓あいさつのあと、慶州市の伝統芸能・サムルノリが披露されました。開幕への期待が高まる中、川俣正氏と北川フラム氏による記念対談「場の力とアート」に引き続き、「八社寺アートプロジェクト」「ならまちアートプロジェクト」に参加した作家による作品紹介を行いました。

■記念対談「場の力とアート」
川俣 正×北川 フラム

北川　奈良には、平城宮跡を含め、日本で律令国家をつくるという理想に燃えて船出した歴史があります。当時は、もともとあった日本の信仰と仏教を交えた壮大な計画を立てたわけです。今回の「東アジア文化都市」では、そういう骨格が分かっていくといいなと思いました。近代になって世界が均質化し、どこも同じような景観で、同じような情報が交錯しています。ですから「東アジア文化都市」を企画するにあたって、改めて「場の力」を考えました。川俣さんには、大安寺の元々塔が建っていた場所に搭であって塔でない、不思議な作品「足場の搭」をつくっていただきました。そこで「場の力」をどう考えられましたか?

川俣　奈良という歴史を踏まえて、奈良で一体何ができるのかを考えました。1300年という悠久の時間軸があり、今現在、生きて生活している中で、つくり手とそれを見る側とが、どう対応できるのか。「歴史と記憶」みたいなものをテーマにして、つくってみたいと思ったんですね。今回、「古都祝奈良」で大安寺を使わせてもらうにあたって、もちろん真っ先に現場を見て、いろいろな資料を掘り起こしていきました。そこから1300年前の大安寺自体の権威や大きさなど、さまざまな角度から「場の力」を検討していきました。

北川　川俣さんは、常に進化する形態のアート公開制作を意味する「ワーク・イン・プログレス」など、独自のアート手法を創造されていますよね。もう40年近く「サイト・スペシフィック―場の力」ということを、世界的に最も早くからやってこられたエースのような存在です。大安寺につくっていただいた作品は、ご自身の歴史も入っているように感じました。

川俣　私の場合はとにかく、「そこでしかできないこと」を「そこでやる」ということをかれこれ何十年もやっています。そうした表現活動の中で、常に追求しているのは、その場の「歴史性」や「記憶」というテーマです。大安寺の歴史は、色んな外国の人が来て、多いときで800人以上の僧侶がいて、非常に国際的な場であったことは確

かです。僧侶たちが外国人とともに、色んな勉強をしていたこともあって、とにかく国際的な場をつくりたいと考えました。私は現在、フランスのパリの美術学校で教えているので、フランスから5～6人学生を連れてきました。さらに、国際ボランティアの方も参加していただき、色んな国の言葉で作品をつくっていったんです。海外の学生たちがうろうろして、片言の日本語で話しているわけですから、近所の人からは「何をやっているんだ?」と不思議がられましたよ。たくさんの人が興味深そうに寄ってきて、色んなお土産をもらったりして、ある種の国際性を感じることができました。

北川　今回は、格式のある8つの社寺が本当に快く場所を提供してくださり、ならまちに関しても、元々、町の人たちが頑張ってつくってきた場所がかかわってくれて、非常に感謝しています。日本を代表する、あるいはシルクロードとの縁でイスタンブールから奈良まで、各国を代表するアーティストがかかわってくれて、今回の「古都祝奈良」を実現できました。本当にさまざまな人たちが協力してくださったおかげで、国家プロジェクトの名に恥じない文化交流事業ができたと思います。川俣さんが作品づくりで意識していることは何ですか?

川俣　色んな地域で色んなアートプロジェクトをやってきて、その地域の何が付加価値かを考えますね。どこまで「場を読む」かが、今、一番重要だと思うんです。たとえば、昔の人の記憶であったり、あるいはそこの場所に以前あった一つの歴史的な建造物であったり。特に奈良では典型的に思ったことです。しかも、奈良の人はすごくのんびりしていて、いいなとも思いました。歴史をひけらかすわけでもなく、しぐさや言葉の中に連綿とした歴史の記憶を内包しているように感じました。お寺の方から聞いた色んな話も、時間軸がずっとある。まさにその場所に今、自分がいると自覚しました。北川さんは、そういう感覚を抱いたことはありますか?

北川　やっぱり国の始まりという歴史は意識しました。当時、この地域の人たちは、赤ちゃんのように全部を吸収してしまう、そんな地域だったと思うんです。そんな感動や、初心、率直さを、この奈良で何か少しでも味わえるような感覚を持ちたいと思い、ちょっと別格のつもりでかかわってきました。それで川俣さんの作品の塔の中に入って真下から真上を見上げたときは本当にびっくりしました。眺めるというより、空間感覚を味わうことができるように思います。

川俣　通常、お寺の塔は中に入って見られるものではありません。塔に登ることもなければ、ただ「建っている」こと自体が一つの大きな意味を持つ、非常にシンボル的な建物です。これまで私は、上に登って周りを眺める塔、あるいは物見台のようなものをつくってきました。上に登れない塔をつくったのは今回が初めてです。大安寺には1300年前に70mの七重塔が2つも建っていた、それだけで非常に威厳があり、一つの場の持つ力を感じさせることができるので、シンボルとしてあればいいなと思ったんです。ただ、昔存在していた塔を再現というのは非常におこがましいと思いましたし、そこまでの技術を自分が持っているわけでもありません。そこで、記録や人の記憶、あるいは伝承されてきた伝統的な工法で丸太足場を組み立てようと考えたんです。何もないところに突然足場が建ち、フランスから連れてきた学生や国際ボランティアも参加して何かをつくっていく。かつてインターナショナルな「場」であったということを作業の中に取り入れたいという思いがあったわけです。そういうある種の非日常的な作業みたいなものをあの場所で一回起こしたい、それが今回のテーマでした。

北川　まさに歴史、時間の上に積み重ねられた風景ですね。本日はどうもありがとうございました。

各作家の作品概要・メッセージは、36頁以降の各作品ページに掲載しています。

なら国際映画祭2016 シンポジウム「アジアから世界へ」

2016年9月18日(日)　ならまちセンター 市民ホール

ジェイコブ・ウォン

オ・ジュンワン

別所哲也

河瀬直美

映画界の未来を担う若き才能をいかに発見し、世界で才能を発揮できるように育んでいくべきか。アジアから世界を目指すには、どのような機会や施策が必要なのか。日中韓の第一線で活躍する映画人たちによるトークディスカッションを行いました。

〈登壇者〉
香港国際映画祭キュレーター ……ジェイコブ・ウォン(香港)
映画プロデューサー …… オ・ジュンワン(韓国)
「ショートショート フィルムフェスティバル & アジア」代表 …… 別所哲也(日本)
なら国際映画祭エグゼクティブ・ディレクター …… 河瀬直美(日本)

なら国際映画祭2016 シンポジウム「アジアから世界へ」

河瀬　東アジアの国によって、映画をつくる事情や背景はそれぞれ異なります。その違いを浮き彫りにしながら、各国が共存していく方法や、東アジアから世界に飛び出すために何が必要かを語っていきたいと思います。まず、香港国際映画祭キュレーターのジェイコブ・ウォンさんは、アジアを中心に若い監督を発掘してきた方です。何を隠そう私の作品もジェイコブさんに見出され、上映の機会を得たという経験があります。それではジェイコブさん、今の中国・香港の映画事情をお話しいただけますか?

ジェイコブ　映画を取り巻く環境は変わっていますし、映画祭の数も作品の数も増えています。しかし作品の品質は厳しくなってきています。これから映画業界を目指す若い監督には「映画を本当につくりたいのか」と自分に問いかけて欲しいと思います。答えがイエスならば何としてでも映画をつくるべきです。若い監督は金銭的な問題も含めて困難に立ち向かっていかなければなりません。また、経験のある監督は責任を担っていく立場です。そして、きちんとエージェンシーにサポートを求めていくことも必要でしょう。

河瀬　ジュンワンさんは、韓国の映画事情をどう感じますか?

ジュンワン　1980年代に政府が映画振興公社KOFIC(Korean Film Council)という支援機関を設立し、若手映画監督の支援を始めました。その後、約10年経過し、政権が変わる度に若手支援は少しずつ削減されています。そこで若手作家は自分たちで働いたり、知人から借金したりして費用を捻出し、低予算で映画を製作しています。一方、韓国の映画産業は国内映画が70%のシェアを占め、観客たちは韓国映画を非常に支持しています。そこに投資家が集中し、100億ウォン単位の映画が沢山つくられています。一方で、映画界の多様性に貢献する作家主義作品への投資は増えないのが現状です。

河瀬　別所さんが代表を務める「ショートショート フィルムフェスティバル & アジア」では国ごとの特徴はありますか?

別所　アジアは強烈に個性やメッセージを発していると思います。日本に関していえば、「観客とどうコミュニケーションを取るのか?」、「自分の伝えたいことは何か?」を、切磋琢磨したという感覚が伝わってきません。一方、中国や香港、韓国には日本にはないアグレッシブさや表現の強さ、作品の個性があると思います。日本と中国、韓国、3つの国の共通特徴としては、独特の間や心のセリフのような表現が、ヨーロッパの作品群との違いを感じますね。

河瀬　ショートフィルムはビジネス展開できると同時に、映画祭への可能性も開けます。その点についてどうお考えでしょうか?

ジェイコブ　さまざまな国際映画祭があるとはいえ、ショートフィルムを受け付けている映画祭は、それほど多くありません。激しい競争の中で、監督になりたいと思うならば、自分の才能を信じ、ショートフィルムに本当に関心があるのかと問うことが重要です。

河瀬　「釜山国際映画祭」の役割はどのようにお考えですか?

ジュンワン　私は「釜山国際映画祭」の役割について話せる立場ではありません。あえて申し上げると、世界中の映画関係者が釜山で韓国映画を観る機会を得るというシナジー効果で、映画祭が成長したと思います。最近の韓国は、自主映画が増えています。しかし昔のショートフィルムにあった輝きが薄れ、スポンサー受けする作品が多いと感じます。映画で自分を表現するというより、メインストリームに入る「自分のレジュメ」となっているんです。一映画ファンとして新しい才能と出会う機会は減ってきています。

河瀬　国によって困難さは違いますね。別所さんの映画祭では、出会いが生まれた成功例は何かありますか?

別所　18年も続けてきた中で、若い映像作家のハリウッドデビューや、シンガポールで名を上げて長編映画をつくるなど、映画祭をきっかけに色んな人が羽ばたいています。出会いの場として、そこにいる人たちが感動を分かち合える映画祭という祭りは絶対に必要だと思うんです。神輿を担ぐ祭りでも、音楽の祭りでも、人間が生きている証として、リアルイベントの感覚はなくならないでしょう。一方、21世紀にいる以上、「カンヌ国際映画祭」に代表されるような20世紀型の映画祭には、疑問を抱いています。現在、スマートフォンで動画を撮り、インターネット上には沢山のショートフィルムや映像が氾濫しています。そういう時代だからこそ、映画祭運営も変化する必要性を感じます。

河瀬　ジェイコブさん、ジュンワンさん、若い新しい才能を見つけた時の感覚というのを教えてもらえますか?

ジェイコブ　私にとって、いい作品とは、ストーリーや出演者、技術、セリフがいいというよりも、映画業界にいる人たちに「君も絶対に観た方がいいよ」と勧めたくなる、そういう感覚ですね。若手の監督が映画祭に出品するのは、知らない人の前で、裸で立たされるような覚悟が必要ですが、勇気をもって、みんなの目に作品をさらけ出して欲しいですね。

ジュンワン　数年前に審査員を務めた、ある国際映画祭が印象に残っています。私は日本人監督を推薦しました。その映画祭では、1作品に1つの賞しかあげられない規定があったのですが、審査員たちを説得して大賞と主演賞の両方を差しあげました。思いがけず発掘したその日本人監督をほかの人にも知らせたいという欲求が生まれ、国際映画会社も紹介しました。その結果、ベルリン映画祭に招待されたのです。

河瀬　「なら国際映画祭」も、若い才能の窓口になっていけたらと思います。最後に別所さんから、お言葉をいただけますか?

別所　いい映画のひとつの条件は「私はすでに知っているかもしれないけれど、あなたの違った視点を見たい」という点だといえます。アジア人という大きな枠組みの中で「世界に何を発信できるのか」という違った視点は映像作家にも、奈良に住まわれている人にも必要かと思います。日本には、資金面で大変な苦労をして映画をつくり続けている映像作家たちが沢山います。厳しい現実があっても、ものをつくり出すパワーがある。奈良という地域が、中国、韓国の皆さんと手を携え、お互いに推薦しあって、欧米の人々を驚かせるような場所になって欲しいと思います。

河瀬　中国、韓国からのお二方も地球上に暮らす一人の人間として、映画と向き合っていらっしゃると思います。そのような視点で、私たちもグローバルに向かっていきたいと思いました。

東大寺にみる東アジアの技術と文化
～「最先端」を積み重ねた歴史都市・奈良～

2016年10月23日(日)　東大寺総合文化センター 金鐘ホール

古代以降、東アジアから奈良に伝わった技術や文化は、当時の日本の「最先端」でした。今日から振り返れば、その「最先端」の蓄積を見ることができるでしょう。仏教史、美術史、考古学、さまざまな分野の専門家を招き、東大寺と東アジアをテーマにシンポジウムを開催しました。

第1部　講演

特別講演
崔鉉植(チェ・ヨンスク)　韓国・東国大学校文科大学史学科教授
「華厳教学を介した新羅と日本の文化交流 ―新羅学生審詳と東大寺智憬を中心として―」

7世紀末の中国において、華厳教学は玄奘系の唯識思想を乗り越える主要思想として受け入れられました。新羅においても事情はよく似ており、8世紀後半から華厳学が仏教界の中心に位置づけられます。8世紀中葉における日本の華厳学受容においても、このような中国と韓国(新羅)の仏教界の動向が反映されました。

日本に華厳教学を初めて将来した審詳が所持した文献のリストをみると、8世紀以後に活動した人々の著述はほとんどなく、審詳が8世紀初頭に新羅に留学したと考えられます。また、文献リストをみると、新羅の華厳教学が智儼や法蔵のもとで修学してきた人々や、彼らの著述を通じて華厳教学を学んだ人々により研究されたことがわかります。

東大寺創建期の代表的華厳学者である智憬も、審詳の『華厳経』講説と彼が伝えた文献によって華厳教学を勉強したと考えられます。智憬の思想、そして初期の日本華厳学者の思想は、審詳の伝えた8世紀初頭における新羅の仏教思想、特に元暁の思想を下敷きにしていたことがわかります。

このように、東大寺を中心に発展した日本の初期華厳学は8世紀末まで新羅仏教と深い関連を持っており、今後も韓国仏教界や東アジア思想史の流れから理解する試みが必要です。

◉ 講演 Ⅰ
永井 洋之　東大寺ミュージアム学芸員
「東大寺に伝わった唐代の文物 ―正倉院宝物 金銀花盤をはじめとして―」

東大寺に伝わってきた正倉院宝物には唐代のものが含まれています。そのひとつである「金銀花盤」には2つの銘文があり、その技法から1つは製作地である中国・唐で刻まれたもの、さらにもう1つは東大寺に施入されてから刻まれていることがわかります。類例もいくつか中国から出土しており、それらと比較すると、当初金銀花盤に付いていた脚は巻葉状のものであったと考えられ、製作時期も8世紀半ばから後半にかけてであったと思われます。唐で作られた作品であることから遣唐使が持ち帰ったものであると考えられますが、いつ日本にもたらされ、東大寺に施入されたかは明らかではありません。献納品であったとも考えられますが、正倉院の南倉には金銀花盤のほかに銀盤、金銅盤といった花形盤がいくつか伝わっていますので、東大寺で花盤が使われていたことがわかります。

また金銀花盤に描かれた「花鹿」は、国産の染織品にもみられることから、国内でも文様のモチーフとして採用されることがありました。伝来したものを、自分たちのなかで消化し、文化のなかに取り入れていくことができたところが奈良だったのではないでしょうか。

◉ 講演 Ⅱ
山川 均　大和郡山市教育委員会主任
「寧波と宋風石造技術 ―最新技術の伝来と継承―」

治承4年(1180年)に焼かれた東大寺は重源を中心に復興されますが、その際に石像が造られます。石像群のほとんどは松永久秀により東大寺が再び焼かれ現存していませんが、史料より中国から来た石工によって制作されたものだということ、また般若寺笠塔婆の銘文から「明州(現在の浙江省寧波)」出身の石工である伊行末が東大寺修理にかかわったことがわかっています。

東大寺復興の中心人物である重源は、中国に留学した際に、寧波を活動拠点としていました。寧波にある東銭湖には史氏一族の墓前石像群があり、ここで使用されている石材は「梅園石」と呼ばれる寧波産の石材で、東大寺南大門に現存する石獅子と同質のものです。このことから東銭湖墓前石像群を造っていた石工集団の一派が、東大寺復興に際して重源に招来され、梅園石を輸入して東大寺石像群を制作したと考えられます。

東大寺では石獅子が造られましたが、東銭湖墓前石造群には石羊や石虎はみられるものの、獅子をモチーフにした石像はありません。本来、石獅子は皇帝陵四門の守護獣ですが、東銭湖墓前石造群の主体者である史氏は南宋朝廷の家臣であり、墓前に石獅子を置くことが許されなかったためです。

重源は皇帝陵の守護獣である石獅子を大胆に翻案し、国家鎮護の寺である東大寺の守護獣としました。まさに東大寺復興において宋代技術が大幅に採用されたことを象徴する存在だといえるではないでしょうか。

第2部　パネルディスカッション

『最先端』から『伝統』へ

パネリスト　崔鉉植/山川 均/永井 洋之
コーディネーター　横内 裕人　京都府立大学文学部歴史学科准教授

横内　第1部でお話いただいた、最先端の思想や技術が、現在に至る伝統となったプロセスについて伺いたいと思います。

永井さんの話では「花鹿」が出てきました。正倉院宝物の動物の代表といえるぐらい、人気のある「キャラクター」といえますが、「現在に至る伝統」という点で少し補足いただけますか。

永井　江戸時代に記された正倉院宝物の点検簿には、金銀花盤と思われる宝物が「唐銅盆　但馬ノ直紋有」として書かれています。つまり、鹿ではなく、馬として記されています。それが近代以降に「花鹿」として認識され、戦後に開催された第1回正倉院展の入場券の図柄として「花鹿」が描かれます。振り返っている鹿は、まさに金銀花盤の鹿をモチーフとしています。金銀花盤自体は昭和22年(1947年)の第2回正倉院展で出品されましたが、第1回の入場券に描かれたということは、「花鹿」が正倉院宝物を象徴する文様のひとつとして広がるきっかけになったと思います。

横内　驚きの事実ですね。「花鹿」は伝来してから、ずっと親しまれたものではなく、馬に間違えられるようほど知られていなかったものが、再発見されて定着していくという面白い事例だと思います。

次に、なぜお寺が最新の文化を受け入れて伝統へとつなげていけたのかという点について、いかがでしょうか。

崔　古代や中世のお寺などの宗教機関では経済的な機能も持っていたということが重要だと思います。韓国でみつかった14世紀の新安沈没船は、京都・東福寺と中国・寧波との貿易船とされていますが、お寺の建立や運営には大量の物資が必要で、貿易にも積極的であったでしょう。そういった交易のなかで、海外の新しい文化や技術も入ってきたのではないかと思います。今、歴史学界で議論になっている752年に日本にやってきた新羅使節も、もしかしたら貿易という役割があったのかもしれません。

横内　使節については、大変ホットな議論です。さて次に、会場でもあります東大寺というのがどう見えるのかという点についてお話いただけますか。

山川　治承4年(1180年)に焼討ちにあい、そこから復興したのが重源です。また、松永久秀に焼かれた後、復興を担った江戸時代の僧に公慶がいます。公慶は重源を大変尊敬していました。両者に共通することは、民衆が一紙半銭、一枚の紙とか、ちょっとのお金でもいいから、とにかく参加するということを大事にしたということです。我々民衆が復興に大幅に参加するということが東大寺復興の特徴といえます。「東大寺をどう見るか」と考えるうえで、民衆たちが復興を熱心に支えたということ、その代弁者として重源や公慶がいたということ、それらをふまえて日本人にとって東大寺とは何かを考えていただけたらと思います。

横内　東アジアのなかの東大寺であること、国家の寺であること、そして民衆の寺であること、東大寺はさまざまな要素をもつ「箱物」なんですね。「箱物」と言うと聞こえが悪いですが、それを支える組織があり、現在まで伝えられているところに、東大寺のすごさがあると思います。歴史都市「奈良」という今回のテーマですが、東大寺以外にも素晴らしい寺院がたくさんあります。それらが最新の文化を今に伝えてくれています。改めて、そのことを理解したうえで、奈良という場所を我々が守っていくことができればと思います。

「東アジア文化都市2016奈良市」クロージング記念シンポジウム
「東アジア文化都市」のレガシーとは～明日に遺すべきもの～

2016年12月26日(月)　なら100年会館 中ホール

「3都市プレゼンテーション」では、開催3都市の代表者がそれぞれの1年間の活動を振り返りました。「パネルディスカッション」では、東アジア文化都市のレガシーの検証と、レガシーをさらに確実なものとして未来へ持続していくために、どのような仕組みや展開が必要なのかについて議論を進めました。

3都市プレゼンテーション

2016年東アジア文化都市 各都市の足跡

奈良市

奈良市長　仲川 げん

奈良市は、美術部門、舞台芸術部門、食部門という3つの大きな柱で事業を構成しました。美術部門では、現代美術を通して、特に会場となった世界遺産の社寺の魅力や価値、役割をもう一度問い直すということを軸としました。舞台芸術部門では、平城宮跡での野外演劇において、SPACと維新派という日本を代表する演劇集団による非常にクオリティーの高い演劇表現を行うことができました。食部門では、船越雅代氏のプロデュースにより、食を通してのコミュニケーションと地域の持つ食の文化、農村資源をしっかりと未来に向けて発信しました。

この3つの柱に加え、交流事業と連携事業を実施しました。交流事業では、日中韓で30を超える事業を実施しました。たくさんの芸術家やその卵、青少年が、お互いの都市を訪問し合い、それぞれの文化をしっかりと感じながら、文化の相違性や異質性、融合性を感じることができる機会としました。

寧波市

中国共産党寧波市委員会宣伝部長　万亜偉（マンアイ）

寧波市は「東アジア意識・文化的融合・相互評価」という理念のもと、読書のまち、音楽のまち、映画のまちをつくり上げるために、100以上の文化イベントを開催しました。

また、中日韓3か国の国民の相互理解と信頼と友情を促進し、交流と対話を深めるためのプラットフォーム作りに積極的な役割を果たしました。「東アジア文化都市2016寧波」のオープニングでは、中国の泉州、青島、日本の横浜、新潟、奈良、韓国の光州、清州、済州という9つの文化都市が寧波に集まりました。クロージングでは、「東アジア文化都市 円卓会議」を開催するとともに、「東アジア文化都市友好碑」の落成式を行いました。

広報においては、東アジア文化都市の全方位的なアピールを積極的に行いました。東アジア文化都市の雑誌を創刊、SNSの公式アカウントを作成、関連ウェブサイトを活用しました。また、新聞やラジオ、テレビでも特別コラムを設けて、東アジア文化都市の認知度を上げました。

済州特別自治道

済州特別自治道行政副知事　全聖泰（チョンソン テ）

済州では、39の事業を実施しました。開幕式では、3都市の伝統文化公演をはじめ、「2016年東アジア文化都市特別企画対談」などを開催し、各都市の特色ある文化を披露しました。

夏には、青少年を対象とした「青少年文化キャンプ」を開催し、高校生による書の交流や大学生による写真交流を行いました。

10月を「東アジア文化都市月間」として、既存の文化行事と連携して東アジア文化都市のコア事業を実施しました。“人が創りあげる文化芸術の島”をテーマとした「カルチャーデザイナーアジアフェア」や、“多様同一”というテーマのもと「済州アートフェア」を開催しました。

閉幕式に先立ち、韓中日3か国の人文学者が参加する「人文学シンポジウム」を開催し、古代から続いてきた韓中日の文化交流の歴史と共通性を持った哲学的背景などについて考察しました。閉幕式では、「東アジア文化都市2016済州文化宣言」に韓中日の代表が署名し、“伝統を越え現代へ”というテーマのもと開かれた3都市の文化公演をもって幕を下ろしました。

パネルディスカッション

パネリスト　佐々木 雅幸(同志社大学特別客員教授／「東アジア文化都市2016奈良市」実行委員会委員)／北川 フラム／万亜偉／全聖泰／仲川 げん

モデレーター　太下 義之(三菱UFJリサーチ&コンサルティング、芸術・文化政策センター主席研究員／センター長)

東アジア文化都市のレガシー、遺産について

太下　はじめに、東アジア文化都市のレガシーについてお話しください。

万　寧波市は春夏秋冬という四季を軸に事業を展開しました。レガシーとしては、主に3つあります。まず1つ目として、この1年間の活動を通して、寧波市民が文化的に豊かになりました。100以上の文化イベントに50万人以上の市民が参加しました。2つ目は、寧波市民の東アジア意識が高まったことです。寧波市民の多くは東アジアの文化を堪能し、その豊かさや多元的な文化を体感しました。3つ目は、国際間の人的交流を促進できたことです。上海、杭州、寧波の3つの国際空港が近くに位置し、寧波空港だけでも、今年1年で出入国者数は昨年同期比10%伸びています。最後に、もう一つ大事なことは、奈良と済州で若者たちの交流があったことです。若者同士の信頼関係と相互評価は非常に大事なことだと思います。

全　済州特別自治道の2016年東アジア文化都市事業は大きく3つに区分されます。第1に、開幕式や閉幕式をはじめとする公式行事は、各国の芸能公演等により韓中日文化のすばらしさを広く知ってもらうきっかけになりました。第2に、耽羅文化祭のような既存の行事と東アジア文化都市事業を連携して行うことにより、済州道の代表的な文化芸術イベントを広くPRする機会となりました。第3に、カルチャーデザイナーアジアフェア、済州ワールドミュージックオルムフェスティバル等の特別企画事業では、済州の道民の暮らしを紹介するとともに、新たにアーティストが活動する場となりました。「東アジア文化都市2016済州」は、今後もさまざまな分野で才能を持ったアーティストを発掘し、道民が文化に接する機会を提供する礎となったと思います。

太下　奈良市ではメインプログラムとして「古都祝奈良」という現代アートの祭典が開催されましたが、アドバイザーの北川フラムさんから、どのようなレガシーが継承されていくという想定であったのかご意見をいただきたいと思います。

北川　奈良が持っていた日本建国の理念といいますか、当時としても本当に革命的なことをやり出したわけですから、その精神を受け継ぐようなことをアートでやりたい、これが重要なことでした。奈良の七大寺、春日大社、そして平城宮跡の方々が呼応してくださったことは大変大きな財産になっていくのではないかと思いました。また今回、黒潮文化といいますか、海を通してつながってきたアジア、東アジアということをきちんと押さえた上で、日本、中国、韓国の学者がずっと続けてきた交流についての研究、あるいは文化交流のベースとなるものをオープニングシンポジウムで話されたことが重要だと思います。

太下　続きまして佐々木先生から、どのようなレガシーが東アジア文化都市、特にこの奈良においてはありえるのかご意見をいただきたいと思います。

佐々木　実は2011年から2014年の間には、歴史認識の問題、領土・国境問題等をめぐって、日中韓3か国の間は必ずしもハッピーではなかった。むしろ非常に厳しい対立が起こった時代でした。国と国の関係は厳しかったのですが、都市と都市が文化芸術でつながり合うというメッセージが、東大寺の“船をつくる”プロジェクトの中にありました。このプロジェクトが東大寺であったということは、よかったと思います。

レガシーをいかに持続可能なものに、そして未来へつなげていくのか

太下　このようなレガシーをいかに持続可能なものにして未来へつなげていくのか、パートナー都市の皆さんにお聞きしたいと思います。

万　東アジア文化都市は非常にすばらしいプロジェクトなので、ぜひ続けていきたいと思います。東アジア中日韓3か国の平和、友情、発展、繁栄は世界にとっても有意義なことです。今ここで、東アジア文化都市に選ばれた都市と、これから選ばれる都市でつくる連盟を創設してはどうかと提案します。東アジア文化都市は未来においても、連盟という制度的な保証を得られるとともに、持続的な役割を果たすことができると思います。

太下　続きまして、済州道の全さんから今後の計画についてお話しいただければと思います。

全　東アジア文化都市を継続するために連盟を創設するという、今の提案を支持します。済州特別自治道は、3都市間の文化交流の拡大と連携の強化について「東アジア文化都市2016済州文化宣言」を採択しました。東アジア文化都市事業で最も有意義なものが、青少年の文化交流だったと思います。未来の世代の主人公である青少年が、交流を通じてお互いを理解し連帯感を高めることは、今後の交流において最も重要であり継続していかなければいけないことだと思います。

太下　こうした点も踏まえて、東アジア文化都市のレガシーを確実にして、より効果を発揮していくためには、どのような仕組みが必要なのかご意見をいただければと思います。

北川　まず、この事業の準備をきちんとするには3年は要るということです。文化の基礎となる各地域固有の生活文化を掘り起こし、

磨いて伝えるには最低3年は要ります。この準備をしないと、イベント頼みになってしまいます。2つ目は、市と市だけでなく、もっと生活の基底にあるコミュニティー同士がつながる仕組みをぜひ取り入れてほしいと思います。このつなぎ方をどのようにするかということが極めて重要になると思います。さらに、今までの経験者が入って次の都市につないでいかないと、単発事業で終わってしまう可能性があると思います。これが一番申し上げたかったことです。こういった文化イベントにかかわるアーティストあるいはサポーターが、今後グローバル化の中で生きていく、どのようにつなげていくかということが大きな鍵になりますので、そこに目をつけていただきたいと思います。

太下　東アジア文化都市ができる前の構想段階からかかわっておられる佐々木先生、いかがでしょうか。いかに持続させていくべきか、この仕組みについてご意見をいただきたいと思います。

佐々木　寧波市から東アジア文化都市連盟創設の提案がありました。これは大変興味深い提案だと思います。東アジアの3か国の間には、EUのような、まとまった政治体が今のところないわけです。したがって、将来的にアジアにおいてもEUのような国家を超える政治体制が展望されてきます。この流れと、文化を通じて都市がダイナミックに交流を進めるという流れがあります。この2つの流れの中で、我々はどのようにうまくバランスをとっていくかが大切で、これについて研究していくことは大賛成です。例えば、日中韓文化大臣会合の下に「推進委員会」のような会合を設置して検討を進めるのがよいのでないかと思います。

太下　ここで仲川市長から、今までの議論を聞いての感想と、奈良市長の立場としての総括をお願いします。

仲川　歴史都市で、このような文化事業を行うことの意義というのは、未来に向けて歴史を継承していくための原動力や推進力を、いかに確保していくかが重要だと思います。それぞれのまちが持つ今までの歴史的な経緯やさまざまな文化遺産や資源というものを、現代の我々がどのように解釈し、未来に向けて位置づけていくのか、その捉え方を問われているように感じます。

この奈良の役割や価値の一つとして、多様性と包摂性があります。奈良時代や平城京の思想の根幹には、世界とつながっていこうとする部分があります。そこでは当然、異文化と出合うわけで、それをどのように乗り越え、時には取り込んでいくのかという、いわゆる多様性と包摂性に行き当たるかと思います。

もう一つ、特に創造性と変革性がまちづくりの視点においては非常に重要だと思います。特に世界遺産のあるまちは、どうしても保存に重きを置きがちですが、活用のシーンをどのように生み出していくかが大変重要だと思います。そのまちが持っている“今ある価値”と、その価値をもとにした“これからの価値”の両方を見ていくことが重要だと思います。

太下　最後に登壇者の皆さんから一言、これからの東アジア文化都市、そして日中韓3か国の文化交流に向けてメッセージをいただきたいと思います。

万　頻繁に行き来して、ともに進歩を遂げていきましょう。

全　韓中日が東アジア文化都市の交流を通じ、世界の中心となる一つの軸になればと思います。

北川　若者がそれぞれの場所で事業に協働して取り組む、このような仕組みをつくっていくと、彼らが非常に元気になっていき、将来的に希望が持てると思います。

佐々木　東南アジアにもASEANの創造都市ネットワーク等があります。そういった意味で、アジア全体に向けたさらなる展開を、例えば2020年ぐらいを目途に広げていくのが、よいのではないかと考えています。

仲川　このプロジェクト自体がワーク・イン・プログレスというか、やりながら成長しているような気もします。今後も継続的にかかわり、事業を展開していきたいと思っています。特に奈良は、中韓とのかかわりの中で誕生した都市でもあり、これからも主体的な責任と役割を持って、文化の力で3か国、東アジアの発展に貢献していきたいと思います。

太下　先ほど佐々木先生から、2020年を目途にというご意見もいただきました。2020年は日本におけるオリンピックの開催年であり、日本全国さまざまな場所で文化プログラムも実施されていくことになります。この動きに合わせて、東アジア文化都市というものを考えていくのも一つのいい機会かもしれません。実は、2020年にはもう一つ別の大きな意味があります。マゼランが、この東アジアの海に「平和の海」という意味で太平洋と名づけたのが1520年。2020年はそこから500年という非常に大きな節目の年になります。この東アジア文化都市という事業も、日中韓3か国が文化交流を通じて東アジアの平和を実現しようという事業ですので、2020年を節目に東アジア文化都市をもう一度見直すということは、非常に意義のあることになると思います。

基幹事業

古都祝奈良 事業概要　32
美術部門　34
舞台芸術部門　54
食部門　62